

## ザンクトガレンの夕暮れ —スイスのエルダーホテルに参加して—

信沢 明

もう夕方の8時を過ぎたというのに、夏の夕暮れの光が旧市街にある家々の赤茶色の屋根の上にまだ明るくかかり、あたりは静寂に包まれている。8月15日にサンモリッツからドイツとの国境をなすボーデン湖に近いザンクトガレンへ午後着いた我々グループはそれぞれのホストファミリーに迎えられた。私は旧市街に夫婦で住むホストファミリーに1週間のホームステイをすることになった。

久しぶりに家庭料理の夕食を済ませ、ベランダに出て紅茶を飲みながら一緒にゆっくりとくつろぐ。この食後のひとときに、私は旧市街の雰囲気を初めて味わうこととなった。18世紀に建てられた建物の3階にある住居のベランダで物音ひとつせず、聞こえたのは8時になった近くの有名な聖オトマール協会の鐘の音だけである。これほど静寂な場所が市内にあるとは夢想だにしなかった。周囲を見渡せば、両隣の開け放たれた窓から白いレースのカーテンが微かに風に揺れ、人々のそれぞれの生活の充足感が窓越しに伝わってくるようである。

またベランダの向こう側には協会の建物があり、その上に2本の見事なバロック様式の塔がそびえ、中世そのままの空間が開けている。奥行が広く、厚い壁の石造りの建物のせい、表通りには人の流れもあるが、車の音、隣人の声などは聞こえない。満ち足りた安堵感を味わいながら、これほどの静寂な時間を過ごすのは絶えて久しい。一瞬時が止まったような感じとなる。おそらく18世紀の時代、いやその前から同じ環境が受け継がれてきたのであろう。このような環境は日本の都会においては希なことである。私はこの静けさに感動し、しばしのあいだ幸福感に浸った。

ふと思い出したのは、サンモリッツの美術館で見たスイスが生んだ巨匠のセガンティーニの絵である。そこにも同じ静寂があった。透き通るスイスのアルプスの空気の下で、特に「Sein（存在）」という題名の絵では、農夫に引かれる牛のカウベルの音が今にも聞こえるようであった。事実サンモリッツからエンガディーンの村を訪れた際に、ドナウの支流のイン川に沿う谷間にある農村における静寂さは、この旧市街における静寂さと対をなして人々の心を長く満たしてきたのであろう。丁度ワインが長い年月をかけて熟成してほのかに芳醇な香りを空間にただよわせているように、そこにはスイスの人々により熟成された静の空間があった。

### エルダーホテル

ユースホテルが若い人を対象とするのに比べ、高齢者を対象に、国内および海外の大学や教育機関と連携して、簡素な宿泊施設に滞在しながら数々なテーマについて学習するのがエルダーホテルである。

発祥の地はアメリカで、日本ではエルダーホテル協会が米国エルダーホテルの提携団体として1986年に創立された。

エルダーホテルのキーワードは“未知へのチャレンジ”である。